

# 「多価値相克状況における合意形成のための動的参照モデル調査研究会」の発足にあたって

遠藤 薫\*

## Research Group on Dynamic Reference Models for Consensus Building in Multi-Value Conflict Situations

Kaoru ENDO\*

**Abstract**— The establishment of the “Research Group on Dynamic Reference Models for Consensus Building in Multi-Value Conflict Situations” was approved by the Board of Directors of TRFST in August 2020. This paper introduces the background, purpose, and planned activities of the study group, and encourages the active participation of transdisciplinary oriented persons.

**Keywords**— Dynamic Reference Model, Consensus Building, Multi-Value Conflict Situations, Okan, TRAFST: Transdisciplinary Federation of Science and Technology

### 1. はじめに

かつてインド首相ネルーは、「このひとつの世界においては、災厄もまた分割できない」と言った。グローバリゼーションの時代、疫病のパンデミックとして世界に感染拡大したのは必然である。しかし、パラドキシカルにも、疫病への対処として、各国、各地域は相互の交通を遮断し、それぞれ独自の対応策をとった。それらは、地域の文化的・社会的・自然環境的特性をふまえつつ、また多様なステークホルダーが重視する価値のせめぎ合いの結果でもある。

このような価値の相克は、人類が有史以来抱えてきた葛藤でもあり、根源的なアポリアでもある。しかし、コロナ・パンデミックは、このアポリアへの現実的な解を緊急にわれわれに求めている。しかし、その解は一意には得られない。なぜなら、状況は日々変化するからである。

このアポリアの解決には、まさに横幹知的視座が必須であり、横幹知をつなぐ場として、2020年9月、「多価値相克状況における合意形成のための動的参照モデル調査研究会」が横幹連合理事会で承認された。本稿は、この研究会の活動をご紹介します。

### 2. 本調査研究会の目的

新型コロナ・パンデミックとそれへの対応は、地球規模でのシステムから個人レベルでの行動までの変容を驚異的な速度で引き起こした。このため、監視による社会秩序優先か個人の自由優先か、経済か防疫か、平等か功利性か、オンサイトかオンラインか、といった様々な相克が表面化した。

本調査研究会の目標は、急速な社会変容が予期されるウィズコロナ時代における社会と個人の意思決定や事業計画に必要な新たな理論的枠組みを構築することである。

さらに、この枠組みをアーキテクチャとして構築することで、ウィズコロナで顕在化する多様な社会価値を弱者にとっても著しく褒貶することなく実現する倫理度指標や持続度指標の高い公共事業・産業ソリューションならびに複合災害時リスク対応に繋がる実装研究を企画する。

この目標を達成するために「相克する多様な価値の関係性を可視化可能な指標群の設計」、「多様な指標に基づくコロナ・パンデミック対応の実態把握」、「ウィズコロナの諸問題解決案を導く合意形成や配慮すべき社会倫理が参照すべきモデル、すなわちコロナ世界観の提示」の3項目について検討を進める。多様性、倫理性を含む公共性、持続可能性、レジリエンスといった概念を妥当性・信頼性をもって測定する指標開発は、今般のわが国のパンデミック対応に必要な多面的価値評価を可能にするこ

\*学習院大学法学部政治学科 東京都豊島区目白 1-5-1

\*Gakushuin University, 1-5-1 Mejiro, Toshima-ku, Tokyo

Received: 4 February 2021.

とはもちろん、ELSIに係る社会変容（Transformation）の多価値モデル表現を可能にすることが期待できる。

上記を踏まえて、本調査研究会は、

- ① 多様なステークホルダー間の相反する価値観にバランスのとれた意思決定と行動を可能にする理論的枠組みを、可視化可能な指標群、社会シミュレーション手法を備えた方法論として提示すること、
  - ② この方法論を、公共分野政策・産業ソリューションおよび複合災害の場面で、指標計測、シミュレーション、熟議等で構成するアーキテクチャとして社会実装し、その正当性を立証すること、
- などを中心に、競争的資金への申請を予定している。

### 3. 研究会の構成

現時点では、本研究会は **Table 1** に示すようなメンバーで構成されている。メンバーの専門分野は極めて多様であり、横幹の研究のプラットフォームとしての活動が期待される。

いうまでもなく、本研究会の活動はこのメンバーに閉じるわけではなく、多くのみなさまとの融通無碍なコラボレーションができることを期待している。

### 4. 活動状況

本研究委員会は、先にも述べたように、2020年9月の横幹連合理事会で、設立の承認を頂いた。

その後、2020年9月に第1回の委員会をオンラインで開催し、活動方針を審議した。

また2020年10月の第11回横幹コンファレンス（オンライン）において、オーガナイズドセッション「ポストコロナ未来社会と横幹知」[1]-[6]を企画し、6人のメンバーが講演を行った。

2020年12月28日には第2回研究会（オンライン）を開催し、今後の活動方針を確認した。その内容としては、

- ① 2ヶ月に一回程度の定例研究会開催
- ② 4ヶ月に一回程度の公開研究会開催
- ③ 横幹コンファレンスにおけるオーガナイズドセッションの企画
- ④ その他

今後、横幹会員学会のみなさまとさまざまなかたちで連携させていただきたいと考えている。

### 参考文献

**Table 1: Group Members**

主査等	氏名	所属	学会
主査	遠藤 薫	学習院大学	元副会長, 社会情報学会
副主査	椿 広計	統計数理研究所	副会長, 日本品質管理学会
委員	竹村 和久	早稲田大学	行動経済学会
	倉橋 節也	筑波大学	理事, 計測自動制御学会
	板倉 宏昭	産業技術大学院大学	理事, 日本経営システム学会
	高橋 泰城	北海道大学	理事, 行動経済学会
	木野 泰伸	筑波大学	日本品質管理学会
	椿 美智子	電気通信大学	元理事, 研究イノベーション学会
	松井 知子	統計数理研究所	日本統計学会
	永原 正章	北九州市立大	計測自動制御学会
	田名部 元成	横浜国立大学	理事, 日本シミュレーション&ゲーミング学会
	出口 光一郎	東北大学	監事・元会長, 計測自動制御学会
	船橋 誠壽		理事, 計測自動制御学会
	本多 敏	慶應義塾大学	理事, 計測自動制御学会
	山本 修一郎	名古屋大学 名誉教授	情報処理学会
	若干名		産業界（横幹技術協議会）、会員学協会からの推薦
幹事学会	計測自動制御学会		

- [1] 遠藤 薫, 「ポストコロナ未来社会と横幹知」『第11回横幹コンファレンス予稿集』, 2020.
- [2] 高橋泰城, 「ポストコロナ未来社会へ向けた行動神経経済学の応用」『第11回横幹コンファレンス予稿集』, 2020.
- [3] 竹村和久, 玉利祐樹, 井出野 尚, 「新型コロナウイルス感染症の社会的注目に関する心理的要因—感染者数の加速度と速度の検討」『第11回横幹コンファレンス予稿集』, 2020.
- [4] 倉橋節也・永井秀幸, 「観光地における新型コロナウイルス(COVID-19)感染予防策」『第11回横幹コンファレンス予稿集』, 2020.

- [5] 永原正章, 「ポストコロナ未来社会に向けたシステム制御の役割」『第 11 回横幹コンファレンス予稿集』, 2020.
- [6] 松井知子, 村上大輔, 「DICE モデルを用いた COVID-19 の気候と経済への影響に関する一考察」『第 11 回横幹コンファレンス予稿集』, 2020.

---

遠藤 薫



1977 年東京大学教養学部基礎科学科卒業。1993 年東京工業大学大学院理工学研究科博士課程社会工学専攻修了。博士(学術)。1993 年信州大学人文学部助教授。1996 年東京工業大学大学院価値システム専攻助教授。2003 年学習院大学法学部教授。現在に至る。社会システム論、社会情報学、メディア論などの研究に従事。社会情報学会、日本社会学会などの会員。

---